

桜川市真壁宣言

第43回全国町並みゼミは、「これからの町並み保存とは？ 度重なる災害からの復旧と、新しい生活様式の中で」をテーマに、新型コロナウイルス感染拡大の第三波に揺れる11月22日、桜川市真壁を拠点に、オンラインで全国をつなぎ開催された。真壁の町並みは、東日本大震災で大きな被害を受けた後、見事に復興を遂げた。会場となった石塚邸も、災害復旧した建物である。その経験を全国の人々と共有し、新しい災害ともいべきコロナ禍のもとで、町並み保存の意味やあり方を探ることが今回のゼミの目的となった。

プログラムは、真壁の町並み保存に最初から関わってきた河東義之・小山高専名誉教授の基調講演からはじまった。「桜川市真壁の震災被害と復旧：課題と展望」と題する講演の中で、河東先生は、復旧の経過をたどり、壊れても取り壊しに至ったケースがほとんどなかったこと、その要因として日頃からの運動の成果とともに、行政による積極的な財政支援を指摘した。また日頃の手入れが被害を小さくすること、そのためには何よりも、建物がいきいきと使われる状態を生み出すまちづくりが基本となると締めくくった。

オンラインで、元気なヴォランティアの方々に導かれて町並み見学をした後、震災からの復興に携わってきた、行政担当者、建築士、住民代表、ディスカバー真壁代表が集まり、藤川昌樹・筑波大学教授のコーディネートでパネルディスカッションが行われた。20年以上に及ぶ、登録文化財制度徹底活用などのユニークなまちづくり活動、震災から10年でなしとげた復旧の成果を振り返りつつ、この状態に甘んずることなく、建物の活用を進め、現下の課題に取り組んでいくために、一層の協力を進める決意が表明された。

今回の講演と討論を通して、私たちは、「新しい生活様式」が、町並み運動が一貫して追求してきた、人間的で自然と共生する社会のあり方にほかならないということに確信を持った。私たちは、これまでの運動に自信を深め、新しい人間関係の確立とよりよい生活環境の創造をめざして、いっそうの努力を重ねることを誓い、ここに宣言する。

2020年11月22日